

「仙台ターミナルケアを考える会」の働きに期待して

鈴木岩弓（東北大学教授）

「仙台ターミナルケアを考える会」の設立 25 周年、おめでとうございます。地道な会の活動が継続して四半世紀という節目の年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

さて貴会が設立されました 1980 年代末というのは、わが国の「死の文化」の流れを考える上で大きな転換の時期でありました。その象徴的な契機は少し前、1985 年 12 月刊行の『中央公論』1986 年 1 月号に掲載された立花隆の「脳死」で、以後「脳死」を人の「死」と考えるか否かという議論が日本社会の前面により多く現れるようになりました。かかる動向は、その議論を遠巻きに見ていた一般の人々の認識を大きく変え、それまで絶対的な真理と考えて疑いもなかった「死」が幻想であって、「死」とはそれぞれの時代や歴史の中の way of life（生活様式）として理解されるべき“文化”であることを知ることになったのです。その結果、それまで「タブー視」されて社会の前面に出ることのなかった「死」の問題が公的な議論の場に引きずり出され、また人が「死」そのものは勿論、「死」と関わりのある葬儀のあり方や墓の選択などを、自己の問題として考えることが不自然ではない社会を生んできました。こうした変化の一つの表れは、私が第 116 回の「生と死」のセミナーでお話しさせていただいた中でも見ました、仙台の市営墓地に見られる造墓行動の時代的变化の中からも明らかでした。その意味で、貴会が設立され活動されてきたこの 25 年間は、もう少しマクロな日本の「死の文化」の流れに照らしてみても、十分に時代的必然性のあることであったのです。

厚生労働省の試算によると、これから 25 年後の日本では 65 歳以上人口が 36% 近くの超高齢多死社会を迎えます。大正期の日本では、乳児期の死亡率の高さを除けば、年齢別の死亡率にはほとんど差はありませんでした。つまり人は若かろうが年老いていようがいつ死んでもおかしくなかったので、「老少不定」という、いわば日本的 *memento mori* の警句が使われていたのです。しかし現在は、医療技術の進歩によって若くして亡くなる人はごく少数となり、現代日本の「死」は高齢期の後にやって来ることが一般的です。こうした世の中では突然死は相対的に少なくなり、自己の「死」を見つめる機会が増えていると考えられます。「死んでしまったらそれで終わりさ」と生と死を分断する言い方も聞かれますが、そうした考えの人がいざ自己の「死」を見つめることになったなら、果たして「終わりさ」と完全に割り切れるのでしょうか？ 戦後の各種社会調査の結果でも、死後霊魂の存在を完全に否定するのは 20~30% でしかなく、過半数の人は死後霊魂の存在を認めています。こうした現状をふまえるなら、超高齢多死社会におけるターミナルケアの問題は、今後とも不可避の重要課題であることは明白です。その意味からも、貴会のますますのご発展をお祈り申し上げます。